

事業所あれこれ

障がい福祉相談支援センター パティオ

あの方の絵手紙 もう出会えない

朝出勤すると「田口直美さんが、昨日、亡くなっているのが発見されました」と。前々日に部屋で倒れているのが窓越しに見えた。救急搬送された。当然、入院になると思っていたが、搬送された病院では歩けるし、本人も入院を望んでいないと言う事で入院にはならなかった。そんなことが直前にあった後だったため、ショックが大きかった。

田口さんは、精神の障がいがあると言っても、一人暮らしで率直に言って健康については無頓着(失礼かな)であった。日常生活にも問題や課題があり様々な助言や支援としても実が結ばないため、率直に言って困った方という印象であった。



直美です

そんな田口さんでも(失礼)、私はファンだった。それは描く絵手紙だ。大らかで、大胆で一言にも魅力があった。そんな絵手紙を多くの方に見てもらいたいと思い、投稿を勧めた。「地域新聞」「いつでも元気」「しんぶん赤旗」等に投稿し何度か掲載された。

掲載が決まると、いつも元気な声で「〇〇に掲載されると連絡来た。絶対見てね」と電話があった。掲載された絵手紙を観るのが楽しみだった。

私は、『福祉は生きもの』と題した本を出版した。その本の表紙に田口さんの絵手紙を使わせてもらった。自分の絵手紙が、本の表紙になった事をとても喜んでいて。その本を読むことを進めた。元気な声で「わかった。読んでみる」といつてくれた。後日、感想を聞いたところ「読んだけど難しいよ。無理みたい」と言いながらワツハツハツハと笑って誤魔化された。

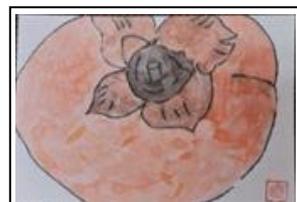
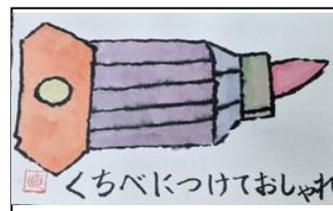
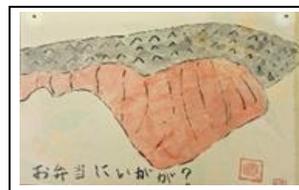
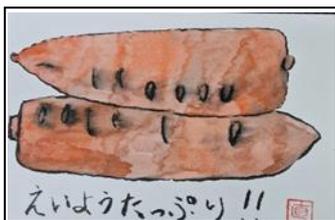
田口さんと約束したことがある。それは、なにかのおりに文を添えて絵手紙を紹介するという事であった。その約束を果たせないまま別れる事になってしまい残念である。

その約束を今果たしたい。「田口さん、今になってごめんね」

田口さんは、「その時は、私のなまえにしてよ」と言っていた。実名にした。

田口直美さんの生きた証と足跡を絵手紙で残したい。

(長島 喜一)



魚にはカルシウムがあります

【 私から一言 】

- ・あかるい笑い声が今でも聞こえてくるようです。私も楽しく生きていきます、ありがとう。(山)
- ・とにかく明るかった、直美さん。満面の笑みが太陽みたいでした。声がもう聴けないのが寂しいよ。(海)
- ・少しだみ声で「あのさあ～」からはじまる直美さんの電話の声、今も聞こえています。忘れないよ。(宮)
- ・元気な声で「王将さん？」といつも事業所名を間違えて電話をかけてくれて「餃子いくつですか？笑」と話すと、大笑いしてとても喜んでくださっていました。電話がなくなりとても悲しいですが、笑顔をいつまでも忘れません。(ヘルパー事業所 戸)
- ・おともだちを欲しがっていた直美さん。天国では、たくさんおともだちつくってくださいね。ありがとう。(諫)

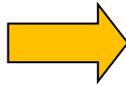
特別養護老人ホーム小鳩園 全面リニューアル

中央4丁目にある小鳩園は、三郷市では最初の特別養護老人ホームとして開設され、三郷市の高齢者福祉の牽引車としての役割を担ってきました。納涼祭などにも招待されるなど、アカシア会とも様々な交流があります。

この程、ホームが全面リニューアルした小鳩園から様子を送ってもらいました。



今まで、ありがとうございました



これから宜しくお願いいたします。 全景と玄関

特別養護老人ホーム小鳩園は、つくばエクスプレス三郷中央駅から徒歩からほど近くに 있습니다。比較的新しい住宅街に囲まれた静かな場所です。小鳩園はそんな新しい住宅が並ぶずっと前、ちょうど50年前から続いています。介護保険制度ができる前から地域の介護を必要とする方を支えてきました。

そんな歴史ある小鳩園も建物の老朽化から建替え・リニューアルを目指して準備を進めてきました。建替え計画が開始されてから約5年、最初の補助金申請が通らず、再挑戦して何とか申請が下りるなど、紆余曲折がありながら、いよいよあと数日でお引越しとなったある日のことです。突然、お風呂の調子が悪くなり、あつあつのお湯が水しかでなくなり、お湯の勢いもそれはそれは力ないものになってしまいました。トイレの水漏れも便器自体が古すぎて対応するボルトがもう製造されておらず、応急処置で乗り越えたり…本当にギリギリの運営になっていました。それでも、長く勤務してきた職員の発案で、旧施設への感謝の言葉を模造紙に寄せ書きをしたりと、思い入れもたくさんありました。



ユニットリビング



スタッフ達



浴室

そんな中2024年8月1日に一斉お引越しを行いました。東都協議会の職員の方々の支援もあり、無事、事故なく55名の入居者様のお引越しを終えることができました。

新施設は、入居者様の過ごしやすさとケアを行うよりよい環境にこだわった作りになっています。介護職員はまだまだ不足していて、2階ユニット型は4分の1しかオープンに至っていませんが、それでも小鳩園は新たな歩みをはじめました。お近くに介護のお仕事を探している方がいましたら、ぜひご紹介ください。

<小鳩園 事務主任 久保遼太郎>



利用者家族のひとこと

我が家が訪問看護を利用することになったのは、父が尿路ストーマになったことがきっかけでした。病院からの勧めでもあり、またストーマについては何もわからないので利用することになりました。

ところが、退院後ストーマだけでなく、他の病気が頻発！脳梗塞、白癩、白内障、粉瘤と、もう何をどうしていいのかわかりません。そんなとき支えとなったのが訪問看護でした。療養上の相談相手が身近にいたことが大きな助けとなりました。

現在は父の状態も安定し、落ち着いています。「訪問看護」に感謝です。これからも「訪問看護」を利用し続けて行こうと思っています。
(「アカシア通信」の一読者)

<アカシア訪問看護 ST から一言>

通信が発行される頃になると、今度の通信はいつですか？ と度々聞かれます。待たれている通信だと思うと嬉しいですね。

能登半島地震復興支援 ボランティア パート2

アカシアの家 ファンハウス
戸井田 美幸子



支援施設 石川県かほく市宇野気2次避難所 グループホーム 1Fユニット
支援派遣期間 令和6年3月28日(木)～令和6年3月31日(日)4日間

派遣で勤務した施設は、ファンハウスと同じように2ユニットのグループホームでした。各9名計18名の施設で入居者の方、近隣の土地に昔から住んでおり、入居者同士互いに会話なども合い、「輪島市が好き。海が好き」と話され好きな地元に住み続けていました。

私が派遣で業務している4日間の間、他の派遣職員1階3名・2階5名と入れ替わり激しい環境の中、入居者の方は誰一人不穩等になる方は居ずに穏やかに派遣職員と馴染み、夜も変わらず眠れている状態でした。入居者の方穏やかな方々で、派遣終了時には「また来てね」と入居者の方に呼び止められ数日でしたが良い関わりをさせて頂けたと感動しました。



震災後、パート職員は休みや退職になり人員不足の為通常は4交代の所、3交代でシフトを組み早・遅は8時間勤務ですが夜勤が15時から翌日10時までと長い勤務時間常勤で行い、派遣は早遅番勤務の為派遣のみの時間帯も発生していました。人員不足の中職責者が連日勤務で3日寝ていない状態などと話が聞かれました。

職員の方も被災しており住む場所がなく施設へ寝泊まりしている方が多く、空き時間など震災時の状況を聞か

せてくれました。「本当にびっくりして怖かった」と言う声が多く聞かれ、「現在も生活の中で大きな音などにもびっくりしてしまい恐怖感が抜けない」と話しており恐怖感の中勤務されていました。

今回、派遣勤務では、常勤職員の方と変わらない業務を行い色々な気付きがありました。その中でどのような状況下の中でも「自分が今できている事。やっていかなければいけない事。決して越えてはいけない事。」などを目の当たりにしはつきりと再認識出来ました。

ファンハウスは現段階いろいろな困難が生じ少しずつ作り上げては戻りの繰り返しの状態ですが、「入居者主体、皆が楽しく過ごせる家」を長い時間かけても基盤の上に作り上げていけるように職員皆で意識しながら取り組んで行かなければならないと強く感じました。

4月中旬に輪島の施設へ戻ると楽しそうに話していました。

輪島市に戻り入居者の方達がどのような顔に変わっているか気になっています。

機会があればまた、入居者の方達のお手伝いと顔を見に会いに行けたらと思います。

* 写真は本文とは直接関係ありません。

友の会コーナー

平和の集い 映画「第五福竜丸」上映 平和の大切さ再確認

三郷わせだ健康友の会 副会長 久々湊 哲夫

「コロナ禍」の間活動に制約がありましたが、8月3日に『平和の集い』を復活して20数名が参加して映画「第五福竜丸」(主演宇野重吉・乙羽信子)をラ・ポルタで上映しました。

薄れ行く記憶を改めて内容を確認すると1954年3月1日に南太平洋のビキニ環礁で米国が無警告の水爆実験を実施し200km離れた水域で操業中の焼津(やいづ)港所属の漁船「第五福竜丸」が死の灰(放射性物質を含む)を乗組員全員がかぶり、9月に1人が死亡した事件で原水爆禁止運動推進の契機となった。同船は、東京湾の「夢の島」に今でも保存・展示されています。



第五福竜丸



魚屋殺すにや 3日はいらぬ、
ビギニの灰降りやお陀仏だ

映画上映後、参加者全員で「核兵器廃絶」・「平和とは？」・「戦争は何故止まない？」等自分の経験や親兄弟の話を交換しました。日常的にTVや新聞・スマホで戦争の悲惨さの映像が有りますが我々一市民が出来る事の一つは「忘れないこと」即ち、今回のような映画をもっと見る事や広島・長崎の「原爆記念館」のような場所を増やして(街の景観が変わるでしょうが)戦争の悲惨さや無意味さを誰でもが日常的に目に触れやすくして忘れなくする事ではないでしょうか。

亡くなられた医師の中村 哲氏が「10の診療所より1本の水路」と言う言葉が忘れられません。

これからも『平和の集い』を続けましょう！！

【編集あれや これや】

最近あった、焦った話

・帰宅したスタッフが慌てて戻ってきた。リュックサックをゴソゴソ。何かを探している。電車に乗ろうとしたがスイカがないと言う。朝改札を出た後のため駅員や交番に届けられていないか聞いたが「ない」という。定期期間は1ヶ月残っている。ガッカリして帰宅した。ところが警察から連絡あり、落とし物として届けられていたとのこと。ホッとするやら嬉しいやら。世の中、捨てたもんじゃないと思ったできごとであった。

偶然にも、誕生日の騒動だった。年齢は〇〇歳。お誕生日おめでとう

(Na)